

小さな癒しの物語の中の大きな救いの物語

——ルカ 13:10-17 とイザヤ書 58 章 (70 人訳) ¹⁾ ——

中 野 実

序

福音書と旧約聖書

新約聖書に収められている四つの福音書はみな、イエス・キリストの物語（ストーリー）を語る試みである。イエスに関する同じストーリーを語りながらも、四人の著者（語り手）がそれぞれの視点から、別々の語り方（ディスコース）をしている²⁾。福音書研究の大切な課題のひとつは、それぞれに特徴的な語り方を的確に把握することである。例えば広く受け入れられている説（いわゆる二資料仮説）に従えば、ルカはQ資料、マルコ福音書、ルカ独自の特殊資料を用いつつ、多くの編集の手を加えながら、イエスの物語を新しく語り直している³⁾。この小論で私たちが注目したい事は、ルカがいわゆる「旧約聖書」（タナク）に含まれる言葉、フレーズ、主題に影響されながら、それらをイエスの物語を語り直すためにどのように用いているかという問題である⁴⁾。別の言い方をすれば、イスラエルの聖なる遺産である旧約聖書が、ルカ福音書のなかでどのように機能しているかという問題である。ルカが親しんだ旧約聖書はいわゆる 70 人訳のあるヴァージョンであったと思われる。それを通して、ルカは古代イスラエルにおける神の救いの歴史によく精通している。しかしルカは、ただイスラエルの過去を知るためではなく、イスラエルの神が今も引き続いて活動しておられる事実を理解するための解釈学的道具として旧約聖書を用いているのである。

ルカにおけるイザヤ書

新約聖書の中で最も多く引用、暗示されている旧約の書物の一つがイザヤ書である。初期キリスト教徒にとってイエス・キリストの出来事を理解する上で最も役に立つ書物だったからである。例えばイザヤ書 53 章をはじめとする「主の僕の歌」はその最もよい例である⁵⁾。初代教会の人々は、(イスラエルの)神がイエス・キリストにおいて何をされたのか、そしてさらに神の民(あるいは教会)を通して何をしておられるのかを知るために聖書を探求したのである。

ルカ福音書にも多くのイザヤ書の用語、フレーズ、主題の引用、暗示、反響(エコー)が見られる。はっきりした引用は次の三つである。ルカ 3:4-6 (イザヤ 40:3-5)、ルカ 4:18-19 (イザヤ 61:1-2, 58:6)、ルカ 22:37 (イザヤ 53:12)。しかし、イザヤ的なフレーズの暗示、反響も数多く見出される⁶⁾。

のちにふれるように、ルカ福音書の中で用いられている最も重要なイザヤ書の箇所のひとつは、多くの学者が認めるように、ルカ 4:18-19 に出てくるイザヤ 61:1-2 (+ 58:6) である。この引用は、ルカ文書全体のプログラムの役割を持つ「ナザレにおけるイエスの説教」(ルカ 4:16-30) の中で用いられている。

この小論における課題

この研究はルカ文書における旧約聖書の機能を探るひとつのケース・スタディーにすぎない。この論文の目的は、ルカ 13:10-17 における「腰の曲がった婦人の癒し」の奇跡物語のなかで(70 人訳による)イザヤ書 58 章のテキストがどのように機能しているかを明らかにすることである。私見では、福音書記者ルカはこの小さな癒しの物語のなかでイザヤ書 58 章を大切な解釈学的道具として用いている。それによって、第三イザヤ(イザヤ 56-66 章)に見られるイスラエルの回復の希望や、イザヤ 61 章に見られる終末的ヨベルの年の希望を新たに告げ知らせる預言者としてのみならず、実際にサタンの束縛の中にいる神の民を(癒し、罪の赦しをとおして)解放して、それらの約束を成就するメシア的解放者としてイエスを描こうとしている⁷⁾。

I

まずルカ 13:10-17 のテキストを様式史的な視点から、次に編集史的視点から分析したい。

ブルトマンの分析によると、ルカ 13:10-17 の癒しの物語は、本来孤立したイエスの言葉であった 13:15 に基づいて構成されたものであり、様式史的には奇跡物語ではなく、論争的な対話というアポフテグマに分類されるべきである⁸⁾。けれども 13:15 だけが孤立して伝承されていたとは考えにくい⁹⁾。13:15 だけが独立して伝承されていて、その枠組みとして奇跡物語が二次的に形成されたと考えるより、むしろルカ 13:10-17 は本来癒しの奇跡物語であり、別に伝承されていた論争的な対話（13:15 を含む）と結び付けられて、論争物語へと発展していった可能性のほうが大きい。例えば、論争部分（13:14-16, 17a）を省いたとしても、残りの部分（13:10-13, 17b）は十分奇跡物語としての構成要素を備えている。大貫隆による（タイセンの研究に基づく）福音書における奇跡物語の定型要素の表に照らし合わせながら分析してみると¹⁰⁾、以下のよう

トポス 1（導入場面）

イエスの登場（いつものように会堂で教えている）

群衆の登場（会堂での礼拝において前提されている）

助けを必要とする女性の登場（以上 13:10-11）

トポス 2（提示場面）

苦難（病気）の特徴描写（13:11）

イエスの方から行動を起こす（13:12）

トポス 3（中心場面）

奇跡行為（手を置く）（13:13）

奇跡の確証の描写（13:13）

トポス 4（終結場面）

当事者、観衆の反応（賞賛、歓呼、13:13, 17b）

以上のような様式分析からすると、前・ルカ的な段階（つまりルカが受け取る前に保存されていた形）において、この物語はすでに簡潔な癒しの奇跡物語（ルカ 13:10-13, 17b）であったが、のちにシナゴグの指導者とイエスとの論争部分（ルカ 13:14-15）と織り交ぜられて、論争物語へと発展させられたのではないか¹¹⁾。このような伝承史的発展をすべてルカの手へ帰することも可能かもしれないが、すでにこのように発展した論争物語をルカが彼の特殊資料の中から手に入れたと考える方がよい¹²⁾。

それではルカ自身の編集の手はどこに見出されるだろうか？ 物語全体にわたって多く見出されるが¹³⁾、我々がここで特に注目したいのは、ルカ 13:16 にあらわれるルカの編集の特徴である。13:16 に関わるルカの編集の特徴を 7 つ指摘したい。

(1) 13:16 に見られる安息日、シナゴグ、そして解放のモチーフの結びつきはナザレにおけるイエスの説教（ルカ 4:16-30）を思い起こさせる。このような物語の舞台設定はルカによる可能性が高い。

(2) 「解放」のモチーフは、明らかにルカ文書で強調されている。例えば、ギリシャ語の単語 ἀφεσις（アフエシス）は新約聖書に 17 回出てくるが、そのうち 10 回はルカ文書においてである。

(3) Δεῖ（デイ）（「しなければならない」）という言葉が 13:16（13:14 にも）に出てくるが、これはルカ神学において、救済史における神の計画の必然的な成就を表現するために重要な概念である（新約聖書に 102 回現われるうち、44 回がルカ文書）。

(4) ルカは「サタン」よりも「悪魔」という言い方を好んでいるようであるが¹⁴⁾、サタン、悪魔のモチーフ自体はルカ文書において大切な役割を持っている（ルカ 4:1-13, 10:18, 22:3, 使 10:38, 26:18）。

(5) ルカ 13:14-15, 16 に出てくる「安息日」の単数形は、ルカの好みである（ルカ 6:1 とマルコ 2:23, ルカ 6:7 とマルコ 3:2, ルカ 6:8 とマルコ 3:4, ルカ 14:3 とマタイ 12:10 を比較せよ）¹⁵⁾。

(6) ルカ 13:16 に出てくる「アブラハムの娘」は、ルカ 19:9 を思い起こさ

せる¹⁶⁾。

(7) ルカ 13:16 の時間的指示(「18 年間」)の前に用いられるギリシャ語 ἰδοὺ (イデュー)(「見よ」)は、直前の物語の中でも用いられている(13:7, 「3 年もの間」)。これもルカ的な表現であろう。

これだけ集中してルカ的な特徴が見つかる 13:16 は、ルカによる編集句(付加)と見るのが妥当である。しかしなぜ、ルカはこの癒しに関わる論争物語に 13:16 を加えたのか? この奇跡・論争物語をこの付加によって、新しい光のもとで読み直そうとしているからである。この問題に立ち入るためには、ルカ 13:16 をより詳細に分析しなければならない。

II

このルカの付加(13:16)の背後に、旧約イザヤ書 58 章のフレーズやアイデアがほのめかされている。この事実は、私の知る限り、これまで誰によっても指摘されてこなかった。

以下に見るように、はっきりした言語上の類似がルカ 13:16 とイザヤ 58 章(70 人訳、以下 LXX と略す)の間に存在する。

イザヤ 58:6	ἀλλὰ λύε πάντα σύνδεσμον ἀδικίας (あらゆる不義の束縛を解いて)
ルカ 13:16	οὐκ ἔδει λυθῆναι ἀπὸ τοῦ δεσμοῦ τούτου (その束縛から解いてやるべきではないか)
イザヤ 58:9	ἐὰν ἀφέλῃς ἀπὸ σοῦ σύνδεσμον (もしあなたの中から束縛を取り去るなら)

G. フィッツァーによれば、σύνδεσμος (シュンデスモス) はしばしば、δεσμός (デスモス) の同義語として用いられる¹⁷⁾。もしこれが正しければ、ルカ 13:16 とイザヤ 58:6, 9 の間には、はっきりした言語的パラレルが二つ見出される。λύω (リュオー)(「解く」)と δεσμός (= σύνδεσμος, 「束縛」)である。

さらに少なくとも三つの関連するかもしれない(第二)イザヤのテキストを参考までに挙げておく。

- イザヤ 42:7 ἐξαγαγεῖν ἐκ δεσμῶν δεδεμένους
 (捕らわれ人をその枷から導き出すため)
- イザヤ 49:9 λέγοντα τοῖς ἐν δεσμοῖς Ἐξελθατε
 (捕らわれ人には、出でよ、と命じる)
- イザヤ 52:2 ἔκδυσαι τὸν δεσμὸν τοῦ τραχήλου σου
 (あなたの首の縄目を解け)

これらのイザヤ的フレーズも影響を及ぼしているかもしれない¹⁸⁾。しかし、ルカとイザヤ 58 章との関連は特に注目に価する。例えば、ルカがイザヤ 58 章 (LXX) 全体をよく知っていた事実は、次のようないくつかの証拠から推測できる。

(1) ルカはすでにナザレにおけるイエスの説教の中でイザヤ 58:6 をイザヤ 61:1-2 と結合させて引用している。イザヤ 61:1-2 と 58:6 の 70 人訳のテキストには、言語的な類似 (「受け入れられる」 δεκτός, 「遣わす」 ἀποστέλλω, 「解放」 ἄφεσις) がある¹⁹⁾。

(2) さらにルカは、行伝 8:23 においてイザヤ 58 章の言い回しを使用している。行伝 8:23 においてペトロは魔術師シモンに「お前は腹黒い者であり、悪の縄目に縛られている」と言う。明らかに「悪の縄目」(文字通りには「不義の束縛, σύνδεσμον ἀδικίας) という表現は、イザヤ 58:6 に出てくるものと同じである。

(3) もう一つの例は、行伝 10:38 である。このパッセージのなかで、ペトロは次のようにナザレのイエスの活動を要約する。「神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは神が御一緒だったからです」。興味深い事に、イエスへの油注ぎは、ルカ 3:21-22 や 4:18 におけるイザヤ 61 章の引用を思い起こさせるのみならず、イエスによる悪魔からの解放の言及はルカ 13:10-17 をも思い起こさせる。しかしここで注目すべき事は、最後の「神が御一緒だったからです」(ὅτι ὁ θεὸς ἦν μετ' αὐτοῦ) というフレーズである。これは、イザヤ 58:11 の「あなたの神はあなたと共にい

るであろう」(καὶ ἔσται ὁ θεός σου μετὰ σοῦ) というフレーズを思い出させるからである。

その他にも、第三イザヤ (56-66 章)、特にイザヤ 58 章の前後のいくつかの箇所がルカによって暗示的に用いられている (例えば、行伝 8:27 においてイザヤ 56:3-7。ルカ 19:46 においてイザヤ 56:7。ルカ 2:14, 行伝 2:39, 22:21 においてイザヤ 57:19)²⁰⁾。

以上のような理由から、ルカはイザヤのテキストを全般にわたって読み親しんでいたようであり、その結果、イザヤ 58 章のある一部分を読んで知っていたのみならず、その全体とその文脈にも精通していたことは十分ありうる。

さらにこの関連で付け加えておきたいことは、ルカ 13:17 とイザヤ 45:16 (LXX) の関係である。すなわち次のように、ルカ 13:17 はイザヤ 45:16 (LXX) を暗示している可能性がある。

ルカ 13:17 κατησχύνοντο πάντες οἱ ἀντικείμενοι αὐτῷ
(彼に反対する者たちはみな恥じ入った)

イザヤ 45:16 (LXX) αἰσχυθήσονται... πάντες οἱ ἀντικείμενοι αὐτῷ
(彼に反対する者たちはみな辱められる)

これもまたルカ 13:10-17 のイザヤのテキストとの結びつきを証明するひとつの証拠となるかもしれない。

しかしここで疑問がわいてくる。ルカが 13:10-17 の安息日をめぐる奇跡・論争物語を語ることににおいて、なぜイザヤ 58 章に特に興味を持ったのか？ ルカは何のためにイザヤ 58 章を用いているのだろうか？

すでに述べたように、ルカ 13:10-17 の物語は、本来癒しの奇跡物語であったが、論争的な対話が加わり、論争物語に焦点が移っている。しかもその論争は安息日をめぐるものである。

イエスが腰の曲がった婦人を安息日に癒された時、シナゴグの指導者 (会堂長) は腹を立て群衆に次のように言う。「働くべき (δεῖ) 日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない」(13:14)。ネストレ・アーラント (27 版) の聖書インデックスを見ると²¹⁾、この会堂長の言葉は二つの

旧約聖書の箇所、出エジプト記 20:9-11 と申命記 5:13-15 を暗示している事が分かる。つまり、会堂長は聖書を根拠に議論しているのである。

他方、ルカ 13:15-16 においてイエスはそれに反論を加える。まず 13:15 において「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも²²⁾、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いていくではないか」と言う²³⁾。動物たちですら飼い葉桶から解かれていくのだから、なおさらこの婦人が病氣から解放されるのは安息日に許されることではないか、という議論である（のちのラビによるカル・ヴァホーメル「軽い物と重い物」という議論の仕方に似ている）²⁴⁾。

しかし、ここで見逃してはならないのは、ルカ 13:16 において少し違うニュアンスが加わるという事実である。イエスの反論のポイントは、人間を癒す事が、安息日でも緊急な場合例外的に許されるどころか（ルカ 14:1-6 の場合とは違う）、むしろ「安息日においても、この女性は束縛から解放されるべき(δεῖ)ではないか」、あるいは、「安息日だからこそ、この女性は束縛から解放される必要がある」という点にある。

このようなルカ 13:16 におけるイエスの議論展開の背後には、イザヤ 58 章があるというのが、我々の読みである。言い換えると、会堂長も旧約聖書を引き合いに出して議論しているように、ルカ 13:16 においてイエスも聖書を根拠に反論している。その聖書的根拠がイザヤ 58 章なのである。

実際に読み手がどこまでそのようなルカの意図を読み取れたのかどうか、よく分からない。しかし、単にルカの頭の中にあっただのみならず、(ルカのように)旧約聖書に精通していた者なら読み取れた可能性は十分にある。

III

なぜ安息日に癒す(解放する)べきなのか？ その根拠になぜイザヤ 58 章がなりうるのか？

(1) 喜びの日としての安息日

すでに述べたように、イザヤ 58 章はイエスの伝道活動における最初の説教

(ルカ 4:16-30) の中でイザヤ 61:1-2 と共に引用された (ルカ 4:18-19 参照。「圧迫されている人を自由にし」の部分イザヤ 58:6 の引用)。多くの学者によって認められているように、ルカ 4:16-30 のナザレでの説教はルカ福音書あるいは使徒言行録を含むルカ文書全体に対するプログラムの役割をもった箇所である。イザヤ 61 章と 58 章の引用によって約束されている救い (解放) の出来事は、イエスの宣教、さらには弟子たち (教会) の宣教の業のなかで実現されていくのである。その際、イエスはこれらの解放の出来事を告知する預言者であるにとどまらず (ルカ 4:43)、それらを実現していくメシア的な解放者として理解されるべきである。実際この説教の後、イエスは多くの解放の業をなす (具体的には癒しと悪霊祓い)。これらの業は神の国 (支配) の実現のしるしと見なすことができよう (ルカ 11:20 参照)²⁵⁾。しかし、これらのイエスの解放 (癒し、悪霊祓いのみならず、罪の赦しも含む。ルカ 7:36-50 参照) の業が論争を生み出す事実も見逃してはいけない (ルカ 5:17-26, 11:14-23)。そのような文脈で、安息日論争も始まる (ルカ 6:1-5, 会堂は論争の場となる。12:11)。さらに安息日における癒しの是非をめぐる論争へと問題は発展していくのである (ルカ 6:6-11, 14:1-6)。このような文学的文脈の中にルカ 13:10-17 の安息日の癒しをめぐる奇跡・論争物語は位置づけられている。

すでに述べたように、ルカ 13:15-16 においてイエスは、安息日における解放 (癒し) の業が許されるのみならず、必要である (「べきである」) ことを強調している。この「安息日における解放」のモチーフは、イザヤ 58 章によってインスパイアされたものであるというのが、我々のテーゼである。

そこで、我々の視線をしばらくイザヤ 58 章とその (特に第三イザヤの) 文学的文脈に向けたい。第三イザヤはバビロン捕囚後、復興をめざすイスラエルの共同体に対して語っている預言者である。そこで問題になっている一つの事は、イスラエルの回復の約束にもかかわらず、救いの実現が遅れていると感じられていた事実であった。いわば神の沈黙 (イザヤ 62:7) の問題である²⁶⁾。神はどこにいるのか、という問いに対して、例えば第三イザヤは次のように答える。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。

むしろお前たちの悪が神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」(イザヤ 59:1-2)。このような文脈の中においてイザヤ 58 章を読むと、そこで語られている基本的な社会正義を行う事と安息日を守る事は、ヤーウェによる救いの約束の成就にとって欠くことのできない必要条件であることが分かる²⁷⁾。例えば、イザヤ 58:5 において第三イザヤは復興をめざすイスラエルに対して、「神が受け入れられる (δεκτός, イザヤ 61:2 も参照) 断食とは何か」と問いつつ、神の御心を次のように伝える。

「私の選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、くびきの結び目をほどいて、虐げられた人を解放し、くびきをことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと」(イザヤ 58:6-7)。一言でまとめると、神の受け入れられる断食とは、あらゆる抑圧された人々に対して正義とあわれみとを行うことである。

このような文脈において第三イザヤは安息日にも言及する(イザヤ 58:13-14)。彼は、安息日を「喜びの日」と呼ぶ。E. アクティマイアーの言葉を用いれば、安息日を尊ぶことは、安息日を喜ぶことである²⁸⁾。もう少し具体的に言うと、「自分のしたい事をやめ、旅をするのをやめ、取り引きを慎む」ことなどであり、その結果「あなたは主を喜びとする」(58:13-14)。それが神に受け入れられる安息日なのである。G. F. ハセルは次のようにまとめて言う。「安息日は、喜びと楽しみの日であり、その日に人々は日常の営みからの解放を経験させられる」²⁹⁾。

このようなイザヤ書 58 章のメッセージをルカがどの程度理解していたのか、よく分からない(もちろんルカは第一、第二、第三イザヤという区別など知らない。全体をイザヤのテキストとして読んでいる)。実際、第三イザヤは、社会正義の行為(具体的な解放の業)と安息日の遵守とを直接結び付けていない。すなわち、「安息日に解放の業をせよ」とは言っていない。しかし、神の救いの実現にとって欠くことのできない必要条件として、(社会的な)解放の業と安息

日遵守がこれほど密接に結びついている例はイザヤ 58 章以外にはないであろう。恐らくルカは、解放の業が行われる事こそ、神の喜ばれる安息日にふさわしいというメッセージを、イザヤ 58 章から取り出しているのではないか？ イザヤ 58 章によれば、安息日、特に神の受け入れられる安息日とは、喜びの日である。より具体的に言えば、喜びを創りだし、その結果神への信頼（イザヤ 58:14 [LXX] における *πείθω ἐπί*, という表現）が生み出されるべき日（イザヤ 58:13-14）である。この点でルカの物語と深く触れてくる。すなわち、安息日におけるイエスの解放（癒し）の業は、癒された婦人の（神への）賛美を生み出し（ルカ 13:13）、驚くべき業を見た群衆たちの喜びを生み出した（ルカ 13:17b）。明らかに安息日は喜びの日とされている³⁰⁾。

(2) ヨベル（安息）の年と安息日

しかし、イザヤ 58 章とルカ 13:10-17 の結びつきはこれだけではない。ここで注目すべき事は、ルカが 4:16-30 においてイザヤ 58 章を 61 章との関連で理解しているという事実である。最近のルカ研究においてしばしば指摘されるように、ルカ 4:16-30 においてイザヤ 61 章（58:6 を含めて）は終末的なヨベルの年に関する聖書の箇所としてみなされている³¹⁾。すなわち、イエスがルカ 4:19 においてイザヤ 61:2 を引用しながら「主の恵みの年」（文字通りには「主に受け入れられる年」、*ἐν αὐτὸν κυρίου δεκτόν*）と語るとき、それはレビ記などに語られている（例えばレビ記 25:10 参照）「ヨベルの年」、「解放の年」（もしくは終末における特別な「解放の年」）を意味しているというわけである。さらにイエスがルカ 4:21 において「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にした時、成就した」という時、イエスは（終末的）ヨベルの年が今日ここで成就したと言っているというのである。実際、イザヤ 61 章がレビ記 25 章や申命記 15 章というような「ヨベルの年」、「安息の年」に関するテキストと共に解釈されている例が（ルカと同時代の）初期ユダヤ教の中に見出される³²⁾。死海写本の中に発見された 11QMelchizedek（メルキゼデク）がその例である。

11 Q メルキゼデク（11QMelch と略す）は、イザヤ 61 章に関する終末論的な

解釈（ミドラッシュ）を含み、レビ記 25 章や申命記 15 章などと結び付けることにより、イザヤ 61:2 の「主が恵みをお与えになる年」を終末的なヨベルの年として理解している。メルキゼデクは天的な存在で、自分の所有である「つながれている者」への解放（イザヤ 61:1）を告げる³³⁾。しかし、その解放は社会的、経済的な解放というより、むしろ罪の重荷からの解放（11QMelch ii 6）、ベリアル（＝サタン、悪魔）の支配からの解放（11QMelch ii 13）という風にメタフォリカルに理解されている³⁴⁾。

この 11 Q メルキゼデクのように、ルカも 4:16-30 においてイザヤ 61 章を終末的ヨベルに関するテキストとして理解していると思われる。もちろん、11 Q メルキゼデクのルカに対する直接の影響は認められない。しかし、イザヤ 61 章のヨベルの年としての解釈が初期ユダヤ教の中である程度広く共有されていた理解であり、ルカもどこかからその解釈を受け継いだ可能性は十分にある³⁵⁾。この関連で注目したい事は、ルカがヨベルの年（安息の年）のイメージを原始教会の理想的な姿を描く際に実際に用いているという事実である。例えば、使徒言行録 4:34 の「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった」という表現は、申命記 15:4 における安息の年に関する神の約束の成就を暗示している。もしこれが正しければ、ルカ 4 章におけるナザレの説教でもヨベル（安息）の年のイメージがイザヤ 61 章を通して暗示されていたとしても不思議はない。

11 Q メルキゼデクがヨベルの年の解放を悪魔（サタン、ベリアル）からの解放として解釈している事も、ルカ 13:10-17 との重要な接触点となる（ルカ 10:18 と 11:20 も参照）³⁶⁾。しかし、ルカの場合、終末的なヨベルの年はイエスにおいてすでに成就しはじめたのであり、この点は大きな違いである。すでにイエスにおいてヨベルの年が始まったのであり、それ故イエスは解放の業（具体的には癒し、悪霊祓い、罪の赦し）を実行するのである。このような解釈が可能だとすると、ルカ 13:10-17 の物語もより良く理解できる。なぜ安息日に解放の業が必要か？ それはすでにイエスにおいてヨベルの年が始まったからである。それゆえ、安息日においても解放の業はなされるべきなのである。

イザヤ 58 章が、61 章のように、はっきりヨベルの年（安息の年）のイメー

ジによって解釈されている例は、残念ながら同時代のユダヤ教（あるいはキリスト教）のテキストには見出されない。しかし、イザヤ 58 章がヨベルの年に関するテキストとむすびついて用いられている例はいくつか存在する。例えば、ダマスコ (CD) 文書 13:10 にはイザヤ 58:6 とヨベルに関するテキストである申命記 15:4 のむすびつきがはっきり認められる。テキストは次のようである。「彼〔宿営の監督〕は、その会衆のうちにしえたげられた者、打ちひしがれた者がないように、彼らを束縛しているすべての枷を解かなければならない」³⁷⁾。旧約にはまれであるがイザヤ 58:6 に出てくる「枷」(תְּרֻצוֹת) という言葉に加え、「打ちひしがれた者」(רְצוּצִים) という言葉もイザヤ 58:6 と共通している。さらに「会衆のうちにしえたげられた者、打ちひしがれた者がないように」という部分は（安息年に関する）申命記 15:4 の「あなたの中に貧しい者はいなくなる」というフレーズを思い起こさせる。もしこのように申命記 15 章とイザヤ 58 章とが結び付けられて読まれていた例があるのであるなら（旧約偽典のひとつ、Pseudo-Phocylides 22-29 も参照）³⁸⁾、イザヤ 58 章にヨベルの年（安息の年）のイメージが重ね合わせられ、理解されたとしても決して不思議ではない。

いずれにせよ、ルカがイザヤ 61 章を（終末的）ヨベルの年に関するテキストとして理解している場合、イザヤ 61 章と結びつきの深い 58 章にもヨベル（安息）の年のイメージを重ね合わせて理解したと想定することは十分可能であろう。もしそうなら、ルカは 13:10-17 においてイザヤ 58 章のヨベル的な解釈を用いて、次のように考えているのではないか。すなわち、イエスにおいてヨベルの年が始まった現在、安息日においても（ヨベルの）解放の業は実現されるべきなのである。それこそ（第三）イザヤが 58 章で語る神に受け入れられる「喜びの日」としての安息日なのである。

さらにイザヤ 58 章のヨベル的な解釈と共に、ヨベルの年、安息の年、そして安息日という密接な関連（例えば、あらゆる仕事、束縛から解放され、安息を得るという共通項）を視野に入れると、安息日における解放の業は単に許される行為というだけに留まらず、「安息日だからこそ、18 年もの間サタンの奴隷

であったこの婦人は（アブラハムの娘なのだから）解放され、今こそ安息が与えられるべきだ」というメッセージすら読み取れるかもしれない。

このように、イザヤ 61 章に加え、58 章が解釈学的な道具として用いられることにより、ルカ 13:10-17 の癒しの奇跡・論争物語はルカによって新しく語り直されているのである。

IV

以上見てきたように、ルカは 13:10-17 において「腰の曲がった女性の癒し」をめぐる論争物語を新たに語り直すにあたり、解釈学的道具としてイザヤ 58 章を用いていると思われる。これまでの議論を念頭に置きつつ、ルカ 13:10-17 をルカ文書（福音書のみならず使徒言行録も含む）の文脈の中に位置づけてみたい。

ルカ 4:16-30 における最初の説教において、イエスは「主〔神〕の恵みの年」、文字通りには「主に受け入れられる（δεκτός）年」の成就を宣言した（ルカ 4:19, 21）。この「受け入れられる」という言葉はイザヤ 61:2 と共にイザヤ 58:5（LXX）にも現われる重要なキーワードである。しかし同時に、イエスはナザレの人々がそれを受け入れない現実をも指摘する（ルカ 4:24。ここでも δεκτός [デクトス] が用いられている）。神の受け入れられる業を人間が受け入れない。このイエスが予告する人間の現実、ルカ 13:10-17 においてもはっきり現われる。神が歓迎されるイエスの解放（癒し）の業を、会堂長などイエスの反対者たちは歓迎しない（ルカ 13:14, 17a）。

しかし、イエスの解放の業を喜ぶ人々もいる。癒された婦人はもちろん（ルカ 13:13）、群衆たちも「こぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ」（ルカ 13:17b）。彼らの喜びは、イスラエルの構成員であったアブラハムの娘がサタンの支配から解放された事に対する喜びである。サタンの支配にあったことは、病気の中にあって社会的にもマージナルな存在とされていた事実と切り離せない。サタンの支配から取り戻されて、真のイスラエル（教会？）を形成する一員として回復されたことへの喜びである（行伝 26:17-18）。

も参照)³⁹⁾。この関連で注目すべき箇所は、ルカ 8:1-3 である⁴⁰⁾。それによると、悪霊を追い出して病気を癒してもらった婦人たちがイエスとその一行に奉仕していたと言われている。ルカ 13:10-17 において癒された婦人がイエスのグループに属したとは言われていないけれども、ルカ 8:1-3 との関連で見ると、解放された（癒された）者がイエスの共同体（まことの神の民、イスラエル）の一員になっていくことが期待されていると言ふべきかもしれない。

さらに注目したい事は、ルカは（ルカの描くイエスは）安息日自体に決して批判的ではないという事実である⁴¹⁾。問題になっているのは、安息日の解釈であり、安息日の主であるイエスは（ルカ 6:5）、安息日の本当の意味を成就する主なのであり（ルカ 13:15 の「主」という言葉に注目）、彼の行為はむしろ聖書にもかなっている。その根拠がイザヤ 58 章だというわけである。この関連で興味深いのは、同じイザヤ 58 章を引用しているバルナバの手紙の場合である。バルナバの手紙は、いわゆる使徒教父文書に属す、紀元 2 世紀に書かれた初期キリスト教文書である⁴²⁾。バルナバ 3:1-5 にはイザヤ 58 章の引用が見られる。その引用のコンテキストは、ユダヤ教的な儀式の廃棄とイエス・キリストによる新しい律法の制定に関する議論である（バルナバ 2:6 参照）。さらにバルナバ 15:8-9 を見ると、喜ばしい（イザヤ 58 章、61 章を思い起こさせる δεκτός [デクトス] が用いられている）安息日とは、もはやユダヤ教の安息日ではなく、キリストの復活した日曜日である。バルナバの手紙におけるイザヤ 58 章の用い方は、イスラエルとの非連続性を強調するためである⁴³⁾。

しかし、ルカの場合はイスラエルとの連続性が明らかに強調されている。イエルヴェル（Jervell）によれば⁴⁴⁾、割礼を受けたメシアを強調する（ルカ 2:21）のはルカだけであり、他の登場人物を描く際もユダヤ教の宗教的伝統に忠実な者として描く傾向がある（例えばパウロに関して、行伝 21:17-26, 25:8 参照）。古代イスラエルの救いの歴史において働かれたのと同じ神が、今イエスにおいて働いておられ、神の支配が実現していく。これがルカの強調点だからである。

イエスにおける解放の経験を通して、まことの神の民が回復される。そして、

その希望は異邦人にも拡大していく。これも見落としてはならない重要な点である。この関連で注目したいのは、使徒言行録 10:34-43 である。これは使徒ペトロのコルネリオの家における説教であり、すでに指摘したように、ルカ 4:16-30 や 13:10-17 の暗示がそこに見られる。例えば、行伝 10:38 の「神は聖霊と力によってこの方（イエス）を油注がれた者となさいました」は、ルカ 4:18 におけるイザヤ 61:1 引用の暗示であり、さらに「悪魔に苦しめられている人たちをすべて癒された」はルカ 13:10-17 の暗示であろう（すでに述べたように「神が御一緒だった」はイザヤ 58:11 の暗示である）。ペトロは、この説教の中でイエスの物語を簡潔に語りながら、イスラエルの子らに送られた福音について説明するが、「どんな国の人でも、神を畏れて正しい事を行う人は」誰でもこの福音にあずかると断言する（行伝 10:35）。ここで「神に受け入れられる」（δεκτός）というイザヤ的な言い回し（イザヤ 58:5, 61:2）が用いられている事も興味深い。いずれにしろ、ルカ福音書が物語る、主イエス・キリストによるイスラエルの子らの救い（解放）が今や異邦人にも拡大されうる事が、ペトロによって明らかにされている。実際、そのあとでペトロの説教を聞いていた異邦人の上に（救いの確証としての）聖霊が降ったことをルカは報告している（行伝 10:44）。イエス・キリストによる解放を異邦人もまた経験できることを、パウロも行伝 26 章において強調する。「私〔回心において現われた主イエス〕は、あなた〔パウロ〕をこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとへ遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らが私への信仰によって、罪の赦し〔ἀφεσις は、解放という意味でもある〕を得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである」（行伝 26:17-18）。

結 び

これまでの様々な議論を通して一体何が分かったのか？ これまでの議論が正しい方向性を示していたとするならば、ルカ（いわゆるルカ文書の著者）はかなり 70 人訳聖書に精通していたことが分かる。ルカがユダヤ人なのか、異邦

人なのかという問題は、未だ決着のつかない問題であるが、少なくとも我々がこの小さなケース・スタディーから言い得ることは、ルカがヘレニズム的な著作家であると同時に、かなり長い間にわたって、(ユダヤ教徒としてか、あるいはいわゆる「神を畏れる者」として) 70 人訳聖書をはじめ、初期ユダヤ教の文学、宗教に親しんできたらしいという事である⁴⁵⁾。ルカは、その豊かな知識を用いて、イエスの物語を新しく(新しい状況の中で)語りなおしている。ルカ 13:10-17 は確かに小さな癒しの物語であるけれども、ルカは大いなるイスラエルの救いの物語を視野に入れながら、それを語り直すのである。この我々の結論は、ルカ研究の最近の動向と一致する方向性を示している。最近の動向を示すものとして例えば、長年にわたってルカのユダヤ教的背景の重要性を強調してきたヤコブ・イエルヴェルによる新しい使徒言行録の註解書(1998 年)、David P. Moessner (メスナー)、David L. Tiede (ティード) の編集する「イスラエルの解釈者としてのルカ」(Luke the Interpreter of Israel; 1999 年～) というシリーズなどを参照せよ⁴⁶⁾。

しかし、確かにルカがイスラエルの遺産を大切にする傾向がある一方で、反・ユダヤ主義的とも思える傾向が同時にルカ文書の中には読み取れる(例えばルカ文書の結びである行伝 28:26-27 におけるイザヤ 6:9-10 の引用、および行伝 28:28 におけるパウロの結論の言葉を参照)。このアンビバレントな側面をどう理解したらよいのかは、引き続き考えていくべき重要な課題である⁴⁷⁾。

最後にもう一つ付け加えるなら、ルカ 13:10-17 は小さな奇跡物語であるが、ルカの「女性」に対する視点を理解する大切な箇所の一つでもある。実際、フェミニスト神学の立場(その立場に立つ聖書学者)からの研究も見られる(E・シュスラー・フィオレンツァ, 絹川久子, Turid Karlsen Seim [セイム])。これらの研究との対話も大切な課題のひとつである。(なかの・みのる)

注

- 1) 松永希久夫先生、ゴードン・レーマン先生への献呈論文集のために執筆する特権を与えられ、心より感謝している。松永先生は、私にとって新約聖書学を

最初に手ほどきしてくださった先生のひとりであり、レーマン先生は、私が学部一年に入学した同じ年に、九州から東神大へ来られたこともあって、ずっと親しくしていただいていた。残念ながら、主題「福音と派遣」に直接関連する論文を書くことはできなかったけれども、これまでの学恩を感謝して、この論文を両先生に献呈したいと思う。

この小論の基礎になった研究は、もともと 1995 年の秋学期に北米クレアモント大学院で行われたジェイムス・A. サンダース教授による *Luke and Scripture* と題する博士課程の学生のためのゼミにさかのぼる。

- 2) Seymour Chapman, *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (Ithaca: Cornell University Press, 1978).
- 3) ここでは、ルカ福音書と使徒言行録の著者を便宜的にルカと呼ぶ。ルカがパウロの伝道旅行の同伴者であったかどうかについて、ここで議論するゆとりはない。しかし、いずれにせよ、ルカ・使徒言行録全体がひとりの人物（ルカ）によって書かれ、一つの作品として読まれることが期待されていることを前提にする。それ故、この論文では常に使徒言行録も視野に入れて論じることにする。
- 4) ルカが福音書を書いたと思われる紀元 1 世紀の終わりには、旧約聖書 (Tanakh) の正典はまだ完全に確立していなかった。特に諸書の部分はまだ閉じられていなかったようである。モーセ五書、預言書、諸書の三つの部分からなる旧約正典が完成するのは、紀元 2 世紀以降と考えられる。しかし、モーセ五書と預言書の部分に関してはすでに閉じられ、権威づけられていたと考えてよい。ルカ 16:29, 24:27 参照。Lee M. McDonald, *The Formation of the Christian Biblical Canon* (Revised & Expanded Edition; Peabody: Hendrickson, 1995), 25-54 も参照。
- 5) ヘンゲルによると、メシアの代理的な苦難をイザヤ 53 章と結び付けて語る例は初期ユダヤ教には見つからない。しかし他方、イエスの死に関する最初期のキリスト教の解釈においてイザヤ 53 章が大きな影響を与えたことは疑いえない。Martin Hengel, *The Atonement: The Origins of the Doctrine in the New Testament*. Translated by John Bowden (Philadelphia: Fortress, 1981), 59 参照。
- 6) 例えば、ルカ 2:30-32 (イザヤ 52:10, 42:6, 49:6), ルカ 7:22 (イザヤ 26:19, 29:18, 35:5-6, 61:1), ルカ 8:10 (イザヤ 6:9-10), ルカ 19:46 (イザヤ 56:7), ルカ 20:9 (イザヤ 5:1-2) など。James A. Sanders, "Isaiah in Luke," in Craig A. Evans and James A. Sanders, *Luke and Scripture: The Function of Sacred Tradition in Luke-Acts* (Minneapolis: Fortress, 1993), 14-25, esp. 20 参照。

- 7) メシアとは、王的、祭司的、あるいはその他の仕方で性格付けられた終りの時に現われる解放者である。この定義に関して, Gerbern S. Oegema, *The Anointed and his People: Messianic Expectations from the Maccabees to Bar Kochba* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1998), 26 参照。
- 8) R. ブルトマン『共観福音書伝承史』第1巻, 加山宏路訳 (新教出版社, 1983年) 22, 103 頁。
- 9) ルカ 13:15 だけでは十分に意味が通じない。何らかの状況設定なしに 15 節の意味は十分伝わらない。恐らく 13:14 のような安息日をめぐる議論と一緒にあって, 論争的なアポフテグマを形成しながら, 伝承されていたのであろう。François Bovon, *Das Evangelium nach Lukas: 2. Teilband Lk 9,51-14,35*. EKK III/2. (Zürich: Benziger Verlag, 1996), 395 参照。
- 10) 大貫隆『終わりにから今を生きる——姿勢としての終末論』(教文館, 1999 年) 84 頁。Gerd Theissen and Annette Merz, *The Historical Jesus: A Comprehensive Guide*. Translated by John Bowden (Minneapolis: Fortress, 1996), 283-5 も参照。
- 11) Ulrich Busse, *Die Wunder des Propheten Jesus: Die Rezeption, Komposition und Interpretation der Wundertradition im Evangelium des Lukas* (2 Aufl.; Stuttgart: Verlag Katholisches Bibelwerk, 1979), 289-304, esp. 293. エリサベス・シュスラー・フィオレンツァ『彼女を記念して——フェミニズム神学によるキリスト教起源の再構築』山口里子訳 (日本基督教団出版局, 1990 年) 196-8 頁も参照。さらに, 彼女の最近の著作 *But She Said* においてもルカ 13:10-17 に言及しているが, 彼女はそこで, ルカが癒しの物語と安息日論争とを混ぜ合わせることによって, 一人の女性に焦点を当てていた癒しの物語を男性中心の聖なるテキストに変えてしまったと主張する。Elizabeth Schüssler-Fiorenza, *But She Said* (Boston: Beacon, 1992), 196-217. フェミニスト神学の立場からのルカ 13:10-17 の解釈の一例として, Hisako Kinukawa, “The Miracle Story of the Bent-Over Woman (Luke 13:10-17). An Interaction-Centered Interpretation,” in ed. Ingrid Rosa Kitzberger, *Transformative Encounters: Jesus & Women Reviewed* (Leiden: Brill, 2000), 292-314 も参照。
- 12) ルカ 13:10-17 全体にわたって, 伝承の要素が見られる。ルカにおける編集的な要素と伝承的な要素について, Joachim Jeremias, *Die Sprache des Lukas-evangelium* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980) を参照。しかし, ルカ 13:10-17 に見られる癒しの奇跡と論争という二つの要素は, 有機的に統合されており, ひとつの一貫性をもった物語になっていると見なす学者が最近増えている。

例えば, Bovon, *op.cit.*, 2:392-3; M. Dennis Hamm, “The Freeing of the Bent Woman and the Restoration of Israel: Luke 13:10-17 as Narrative Theology,” in *JSNT* 31 (1987), 23-44 参照。

- 13) ルカの編集的な特徴と思われる表現を以下にいくつか例としてあげる。(1) 13:11 の γυνή πνεῦμα ἔχουσα ἀσθενείας をルカ 4:33, 8:27 と比較せよ。’Ασθένεια については, ルカ 8:2 を参照。(2) 10 節の ἦν... διδάσκων というペリフラスティックな未完了はルカ的。(ルカ 4:31 とマルコ 1:21 を比較せよ)。(3) 12 節の ἰδὼν δέ. ルカ 2:17 を参照。(4) 12 節の προσφωνέω もルカ的。マタイ 11:16 以外はルカ文書のみ。(5) 13 節の παραχρήμα に関してはルカ 1:64 参照。マタイ 21:19f. 以外はルカ文書のみ。(6) 15 節の ὁ κύριος もルカにとって大切な表現。2:11, 5:8, 12, 17, 7:13, 18:41, 行伝 2:36, 10:36 参照。三好迪『小さな者の友イエス』(新教出版社, 1987 年) 224-6 頁を見よ。(7) 15 節の ὑποκριταί もルカ的かもしれない。ルカ 6:42 は伝承(マタイ 7:5 と比較)であるが, ルカ 12:56 は編集であろう。
- 14) しかし, ルカは 22:3 ではあえて「サタン」を用いている。
- 15) 「安息日」の複数形の使用は恐らく 70 人訳の影響と考えられる。ルカもあえてそれを用いたり, そのままにしているケースも見出される。Bovon, *op.cit.*, 2:397, note 22.
- 16) 「アブラハムの娘」という表現は非常にまれである。新約聖書では, ルカ 13:16 だけである。似た表現については, IV マカベヤ 14:20, 15:28, 17:6, 18:20 を参照。Joel B. Green, *The Gospel of Luke* (NICNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1997), 525。より詳しい「アブラハムの娘」についての考察は, Turid Karlsen Seim, *The Double Message: Patterns of Gender in Luke-Acts* (Edinburgh: T & T Clark, 1994), 39-57 を参照。
- 17) G. Fitzner, “σύνδεσμος” TDNT 7 856-9, esp. 856.
- 18) イザヤ 42:7 には, イザヤ 61:1 とのテーマ上の結びつきが見られる(目を開く。捕らえられた人を解放)。イザヤ 42:7 の ἐξάγω という単語は, 出エジプトを思い起こさせる。レビ記 25:42, 55, 行伝 7:40, 13:17 を参照。
- 19) イザヤ 61 章とイザヤ 58 章のテキストの間には, さらに多くの言語的な結びつきが見出される(すでにヘブル語でも)。ここではギリシャ語における結びつきを挙げる。καλέω (58:12-3, 61:3, 6), σποδός (58:5, 61:3), πτωχός (58:7, 61:1), οἰκοδομέω (58:12, 61:4), γενεά (58:11-12, 61:3-4), αἰώνιος (58:12, 61:4, 7), ἔρημος (58:12, 61:4), ἀδικία (58:6, 61:8)。

- 20) David W. Pao, *Acts and the Isaianic New Exodus* (WUNT 2: 130; Tübingen: Mohr Siebeck, 2000), 141-2, 230-1.
- 21) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* (27. revidierte Auflage; Deutsche Bibelgesellschaft, 1993), 770-806.
- 22) なぜかイエスの反対者が複数になっている。13:17 でも「反対者」(複数形)という言葉が用いられている。会堂長に同意する人々がまわりにいる事を前提しているのだろうか。
- 23) ミシュナ・シャバット 7:2 によると、39 種類の労働の行為が安息日に禁止されている。ルカ 13:10-17, 特に 15 節との関連で興味深いことは、つなぐ行為と解く行為が禁止されていることである。しかしながら、ミシュナはつなぐ事、解く事に関して一貫した見解を提示しているわけではない。例えば、ミシュナ・シャバット 15:1-2 には、つなぐ事、解く事についての例外的な注意が与えられている。Jacob Neusner, *The Mishnah: A New Translation* (New Haven: Yale University Press, 1988), 187-8, 197-8 参照。
- 24) ルカ 13:15 には多くの伝承的な要素が見られるので、ルカはその部分を伝承から受け取った可能性が大きい。実際内容的には、Q に遡るかもしれないルカ 14:5/ マタイ 12:11-12 に近い。
- 25) 三好, 前掲書, 217-231 頁, 特に 219-220 頁。
- 26) 関根清三『旧約聖書思想 24 の断章』(岩波書店, 1998 年) 77-86 頁。大島力『旧約聖書と現代』(NHK 出版, 2000 年) 174-190 頁。P.D. ハンソン『イザヤ 40-66 章』北博訳(日本キリスト教団出版局, 1995 年) 304-9 頁。Brevard S. Childs, *Isaiah* (Louisville: Westminster John Knox Press, 2001), 475-481.
- 27) Brooks Schramm, *The Opponents of Third Isaiah: Reconstructing the Cultic History of the Restoration* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995), 137.
- 28) Elizabeth Achtemeier, *The Commentary and Message of Isaiah 56-66* (Minneapolis: Augsburg, 1982), 60.
- 29) Gerhard F. Hasel, "Sabbath," in *Anchor Bible Dictionary* (Vol. 5; New York: Doubleday, 1992), 852.
- 30) 「安息日は喜びの日であるべきだ」というテーマにおいてイザヤ 58 章とルカ 13:10-17 とは結びついているけれども、その点で残念ながらイザヤ 58 章の 70 人訳のテキストとルカ 13:10-17 の間に、はっきりした言語的な結びつきを発見する事は出来ない。
- 31) ルカ 4:16-30 におけるイザヤ 61 章の引用の中にヨベル(安息)の年のイメー

ジを読み取る学者に次のような学者が含まれる。Craig A. Evans, *Luke* (New International Biblical Commentary; Peabody: Hendrickson, 1990), 70-76; Sharon H. Ringe, *Luke* (Westminster Bible Companion; Louisville: Westminster John Knox Press, 1995), 65-71; James A. Sanders, "From Isaiah 61 to Luke 4," in Evans and Sanders, 46-69; A. Strobel, "Das apokalyptische Terminproblem in der sogen. Antrittspredigt Jesu (Lk4, 16-30)," in *TLZ* 92 (1967), 251-54 など。日本語で読めるものでは、H. G. キッペンベルク『古代ユダヤ社会史』奥泉, 紺野訳 (教文館, 1986 年) 258-267 頁, デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換』上, 東京ミッション研究所訳 (新教出版社, 1999 年) 148-210 頁を参照。ルカ 4:16-30 の理解のために 11Q Melch の重要性を認めるけれども, ルカ 4 章におけるヨベル的な解釈には慎重な姿勢をとる学者もいる。例えば, Robert C. Tannehill, *The Narrative Unity of Luke-Acts: A Literary Interpretation*, Vol. 1 (Philadelphia: Fortress, 1986), 60-68, esp. 68. 日本にもルカ 4:16-30 に関する 11Q メルキゼデクの重要性を指摘する学者がいる。例えば, 原口尚彰「ルカ 4:16-30 と 4Q521/11QMelchizedek: イザヤ 61:1-11 の解釈史の一側面」『新約研究』78-9 頁を参照。

- 32) ヨベルの年, 安息年について, Christopher J. H. Wright, "Jubilee, year of," in *Anchor Bible Dictionary* 3: 1025 - 1030 および "Sabbatical year," in *Anchor Bible Dictionary*, 5: 857-861 参照。
- 33) John J. Collins, "A Herald of Good Tidings: Isaiah 61:1-3 and its Actualization in the Dead Sea Scrolls," in ed. Craig A. Evans and Shemaryahu Talmon, *The Quest for Context and Meaning: Studies in Biblical Intertextuality in Honor of James A. Sanders*. (Leiden: Brill, 1997), 225-240.
- 34) 11Q メルキゼデクのテキスト, 翻訳について, M. De Jonge and A. S. Van Der Woude, "11QMelchizedek and the New Testament," in *NTS* 12 (1965-66), 301-26; Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls: Study Edition* (2vols; Grand Rapids: Eerdmans, 2000), 2:1206-1209 参照。
- 35) ルカ 4:16-30 のイエスの説教が, どの程度史的イエスに遡りうるかという問題について, 残念ながらここに入ることはできない。イザヤ 61 章の引用 (そのヨベル的解釈) も史的イエスに遡るのかどうかについても, ここでは未解決のまま残しておく。
- 36) James A. Sanders は, ルカ 7:36-50 の「罪の女」の物語からもヨベル的なイメージを読み取る。そこでは罪の赦しが負債の免除のイメージで理解される。すでに述べたように, 11Q Melch においても, ヨベルの解放と罪のあがないは結び

- っている。James A. Sanders, “Sins, Debts, and Jubilee Release,” in Evans and Sanders, 84-92 参照。
- 37) ダマスコ文書の翻訳について、『死海文書——テキストの翻訳と解説』日本聖書学研究所訳（第五版，山本書店，1982 年）272-3 頁参照。テキストについて，James H. Charlesworth ed., *The Dead Sea Scrolls: Hebrew, Aramaic, and Greek Texts with English Translations* (vol. 2; Tübingen: Mohr Siebeck; Louisville: Westminster John Knox Press, 1995), 54-55 を参照。
- 38) Pseudo-Phocylides のテキスト，翻訳について，James H. Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha* (Vol. 2; New York: Doubleday, 1985), 565-582, esp. 574-5 を参照。
- 39) イスラエルの建て直しのモチーフは，イザヤ 61 章と 58 章に共通するテーマでもある（61:4 と 58:12 を参照）。
- 40) Jacob Jervell, “The Daughters of Abraham,” in *The Unknown Paul: Essays on Luke-Acts and Early Christian History* (Minneapolis: Augsburg, 1984), 146-157, esp. 148 参照。
- 41) Matthias Klinghardt, *Gesetz und Volk Gottes* (WUNT32; Tübingen: Mohr Siebeck, 1988), 225-240.
- 42) バルナバの手紙について，W. レベル『新約外典・使徒教父文書概説』筒井賢治訳（教文館，2001 年）261-271 頁参照。
- 43) 佐竹明訳「バルナバの手紙」『使徒教父文書』荒井献編（講談社，1974 年）29-55 頁。
- 44) Jacob Jervell, “The Circumcised Messiah,” in *The Unknown Paul*, 138-145.
- 45) 『神を畏れる者』について，荒井献「ステファノの弁明——その使信と伝達」『荒井献著作集 4』（岩波書店，2001 年）187-211 頁参照。
- 46) Jacob Jervell, *Die Apostelgeschichte* (Meyers Kritisch-exegetischer Kommentar; 17th ed.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998)。この使徒言行録の注解書は，1960 年代，70 年代に最も影響力のあった E. Haenchen の注解書に代わるものとしてマイヤーのシリーズから出版された。日本語で読める Jervell の著作として，ヤコブ・イェルヴェル『使徒言行録の神学』挽地茂男訳（新教出版社，1999 年）参照。さらに *Luke the Interpreter of Israel* のシリーズの第 1 巻として出版されたのが，David P. Moessner, ed., *Jesus and the Heritage of Israel: Luke's Narrative Claim upon Israel's Legacy* (Harrisburg: Trinity Press International, 1999) である。
- 47) ルカの持つアンビバレンスについて，Joseph B. Tyson, *Luke, Judaism, and the*

Scholars: Critical Approaches to Luke-Acts (Columbia: University of South Carolina Press, 1999), 134-146; 荒井献「イエスの『神殿の言葉』使徒行伝 6 章 14 節を中心に」『荒井献著作集 4』169-185 頁参照。